

超能力と霊能力

「超能力」という言葉について

世間やマスコミで安易に用いられている言葉に「超能力」というのがある。この超能力という言葉は、最近では一般の人々が口にすることは珍しくなくなったが、使う人によっては、その意味が根本的に違ってくる。

一般的に、この「超能力」という意味には、一般の人々に比べて、何か優れた特異な能力であって、そのメカニズムといったものが解明できないことに対して当てはめているようである。しかしながら、それが現実に目撃された事実である以上、何れは科学の進歩によって解明してくれるではあろうが、今日のところでは「未知」の範疇に留まっている類いのものと言うことであろう。

実は、「超」という言葉を使いだした頃から、「超能力」という言い回しが始まったということである。

昔から「超」という文字は用いられていたが、「超過」とか「超越」という使い方をしていた。しかし、人間のもつ能力に異常なものがあることが見出され、発見されたところから、それを異常といえよかかったが、「超常」といい、「超科学」といった言葉を世の学識者が言い出したことを契機として流行ってしまったようだ。この領域の研究はやはり人間関係、ことに心理に関係し、にわかに思うような実験も出来ない。そのような時に「未知」の意味を込めて、「超」が接頭辞として用いられ、それが次第に一般に向けられたのであろう。

もちろん、これは心理学畑に限ったことではなく、各領域にも共通する。マスコミもこの「一字」による使い勝手の長所もあって、何かと使用し出した。

実をいえば、日本においては、海外での接頭辞「パラ (Para)」から邦訳されて用いられるようになったとも言えるようだ。とって超心理学 (Parapsychology) を提唱したライン博士に当てつけしているのではない。

宗教・宗派でいう「超能力」

上のこととは多少似たり寄ったりとも言えようが、たとえば、ある宗派の信者（あるいはその宗団の指導者であるかもしれないが）、その人が「超能力」という言葉を発した時には、一般の人たちからみれば「いわゆる超能力」を目撃したとして何の拘りもないと思うが、この宗派としての超能力は、自らが属する宗派の信仰によってこそ得られるのだと説明することがある。

しかし、こうした宗教・信仰に基づいて言っている「超能力」は、信仰どころか、宗教の働きから生まれる超能力では決してないのである。

とかく、宗教は神秘主義的要素を有しているというのが一般常識のようであるので、こうした意味から、「超能力」を「売り物」にしようとした傾きがある場合には、われわれ心霊研究者は、それをそのまま黙っていることはできないのである。

宗教は神秘主義であると称することで、「一般においては、そう思い込んで信仰すれば、同様の能力が発揮される。神仏の力で発揮できる」と思わせているのである。悪く言えば宗教企業者のPR というところか。

宗教はいずれの宗派にしても、必ず「奇跡」というものを有している。その奇跡を行う人を、「超能力者」と呼ぶ。この奇跡は、言うまでもなく、今日の科学ではとても解明、あるいは説明できないものであるため、こうした業績(?)を「奇跡」ということとなったといえる。

それが満更間違いでない証拠に、巷間には「誰にでも超能力を発揮できるようになる」と銘打った本が数多く出版され出回っている。その本を買ってみて書かれているとおりに実行してみるがよい。もちろん、信仰することから始めるとしても、そこに「超能力」が発現するかどうか。結局は何の能力どころか、そのカケラすら起きない人が多い。印を組み、ある呪文を唱えてみても、結果が出なければ何の印か呪文かということになる。

ところが、この超能力は各人が有しているということは別の観点から間違いない。ただし、それは目的を持った能力だけに、人によっては発揮できないのである。信仰によってとも言えようが、そうしたことよりも、その人に与えられている使命によって発揮されるかどうかが決まるからである。

すなわち、そこにはすでに与えられている超能力といえる霊能力があるからである。これは単なる修行だけで得ることはできない。

空海にしても、日蓮にしても、与えられた霊能力を発揮した霊媒である。しかし、その人格・品性から人々は霊媒とはいわず、「霊覚者」として敬意を表しているのである。超能力ではない。あるべきものが発揮されているのである。

ところが、時代が進み、心霊科学が発達するにつれ、この奇跡はもはや奇跡ではないことが判って来た。たとえば、キリスト教の奇跡も、もはや、今日の心霊現象として理解され、それらの奇跡以上の奇跡が、一霊媒者によって生起させられている例も数多く存在する。まして、イエス・キリストが行ったという「神癒」も、今日では世界的霊癒霊媒として知られていたエドワーズの業績をみるように、それ以上の難病が霊癒されていた、また今日はそういう時代でもある。その点で心霊科学は神秘を解明する科学とも

いえる。

しかし、一般の人たちはそれを知らない。心霊科学の発達どころか、その存在すら知らない。依然として宗教を神秘主義と考えてそのまま認めている。それを知ってのことか、その神秘を「売り物」にしようという宗教人もいることは、世相を見ても十分理解できることである。

一例としてのユリ・ゲラーの「超能力」

かつてユリ・ゲラーが世界的にクローズ・アップされ、その能力を「超能力」として「スプーン曲げた」だの“折った”だのと世上を騒がせたことがあった。

こうした超能力を一般人はどのように考えて、これを受け入れ、「超能力、超能力」と言っていたのであろう。

しかも、このような状況下において、鵜の目鷹の目の民放は、今とばかりに視聴率を上げようと、ショーとはいえ、「超能力」に関連したものを盛んに放映している。こうなると一般人としてはそれらの情報を文字通り理解してしまうことになる。

だが、われわれ心霊学徒から観れば、これらのものに「超能力」なんていう言葉は使うことができない。なぜなら、既に述べたとおり、本来的な超能力は各自に持たされて生まれて来ているからである。このような事例は、たまたまその人の持たされた能力が発現して人々の目を惹いただけのことである。本当のところは超能力ではなく能力と言い換えることができる普遍的能力である。ただ物質科学では、未だ受け入れることができない超科学の類に入れるであろうが。

現在イギリス在住のユリ・ゲラーは超能力者の一人だというのが、彼に持たされている、与えられていると言った方がよいかもかもしれないが、そうした能力を発揮したまでのことである。大人も子どもも、この能力はどの人にも具わっていると彼も言っているように、お互いはそういう存在なのである。いつそうした能力が発揮されるかもしれない。というより、それが、その人物の使命であれば必要に応じて発現するわけである。ところが、各人には発揮をさせまいとするとんだ邪魔ものとなる人物も多い。とくに我の強い人に多いが。それでも、そんな人にも発現する可能性がある。しかし、場合によればその現象によって、身を亡ぼすことになるかも知れないことを皆さんは知るべきである。

子どもの場合、ことに留意すべきことが多い。子どもは無邪気であり、邪気が無いだけでなく、すべてが純粋であるということから発現が多い。このようにその子どもの成育成長に大きな影響がもたらすものがある。それは、その能力を発揮させようとするあくまでも霊的なものなのである。それが、この能力発揮に副うのである、

これと同じ意味で天童が、凡児・凡童になることでもある。そこに、この靈的なるものに関心を持つことが必要なのである。この違いを理解するためには、あくまでも靈的に関するかぎり心霊科学の上に立って、判断はもちろん、指導もこの法則によらねばならない。学者とか識者といわれている人物、どんな偉方ではあろうが、この指導と判断を現代科学的手法でできるものではない。やろうとしていくら頭脳を捻くったところで、“落ち”はその子どもの将来に大きな悪影響・禍根をのこすだけである。民放の視聴率の犠牲になってはならない。

何とかという電子工学の権威がスプーンを曲げるエネルギーをフィルムに捉えたとか。物理学者がこれに参加して超能力を発揮させようと研究しているとか。週刊誌は、いろいろのことを報道してはいるが、それは一体何になるのであろう。

人間お互いに持たされている霊能によってスプーンも曲がり、折れるのであるが、それによって子どもの学能・才能まで犠牲にしてはならない。

靈的の働きによると言っても、この靈的にもいろいろの働きがある。天才を発揮させた上で精神異常を来たす人もある。これに対してあくまでも天才で一生を通す人もいる。

このスプーン曲げなどの類の超能力、それは物理的心霊現象というものである。テレパシーなどの心理的現象も伴う場合もある。それは、その本人の人格・品性とも関係はなく、また学業とも関係はない。

以上、「超能力」に関するかぎり人間の問題である。人間観の相違である。しかし、所詮、正しい人間観は、心霊科学の上に立って観察することが合理的・原理的・真実なのである。

今日の物質科学は人間とは「肉体一元の存在」という。これが大きな誤りであって、この見解は、肉眼的六官的、単なる外面的にみればその通りであるが、人間は死の状態から「肉体は死物である単なる物質にしかすぎない」ことが判然とする。それが生き生きとして生命を全うして人生を送っている。これは、死物である肉体に靈的なるもの、幽体なるものが働いて生命は与えられている結果である。これを理論的にも実験の上からも、理路整然と結論を出しているのが心霊科学なのである。

そこには、何のインチキも、宗教的言い回しのようなものもない。まして、その実験は、近代科学がとっている実験方法によって実施されているのである。

今日の人を識る学問としての生理学・心理学・生物学、そしてそれらの学問で認めている人間の能力以外に、実は驚くべき超能力を把持させられ、これによって活動しているのである。それらの特殊な能力の持ち主には、あるいは超能力（実は心霊能力）の如何によっては、どんな離れ業をするかもしれない能力が潜在している。こうした事例は

歴史的にもよく知られていることではあるが、それが単なる奇跡でおわり、未知ですまされて研究といったものに進展してなかった。

この心霊科学の上に立って人間を見ると、驚くべきことに、生きる事すべてが超能力で生かされていることがわかる。

かつて「読売」の文化欄に寄稿された方の中に、つぎのような進歩的な学識者もいた。

「私は、いわゆる超能力現象は十分科学の研究の対象となりうると信じている。科学者はあくまで、未知の現象に謙虚でなければならないであろう。超能力現象の解明によって、自然や人間についての新しい認識が生まれるかもしれない。一方、『幽霊の正体みたり枯れ尾花』という幻滅を味わうことになるかもしれないが、私はそれでいいのだと思う。

幻滅の味をきらう科学者からは、創造的な仕事など金輪際生まれっこあるまい。無数の幻滅の中から、一つの真実を獲得する喜びにける心の中にこそ創造の芽が育つ。

うちの次男の言うように、超能力を信じる心が科学を支える力なのだろう」と。

筆者は、半谷高久氏（東京都立大学名誉教授、分析化学、社会地球化学）である。